

巖島——紅葉のころ——高尾ひとみ

巖島は、紅葉谷という谷もあるほど紅葉の美しい島です。

令和二年霜月、巖島を訪れました。薄紅葉、燃えるような紅葉、散り始めた紅葉、さまざまの紅葉を見ることができました。

今年の紅葉はたいそう美しい、そう思っていました。近くを歩いていた女性二人が、「こんなにかいれいな紅葉は今年が初めて」と話す声が聞こえて、同じように感じる人がいるのだと、嬉しい気持ちになりました。

初冬の日の照り返す大野瀬戸

隧道に向かへば石路の花しづか

塀越しの山茶花を見て歩きたる

一葉づつ音もなく散る紅葉かな

せせらぎの兩岸に散る紅葉かな

山鳩のしばらく居たる紅葉かな

下りゆく石段に散る紅葉かな

竹垣に沿うて歩ける紅葉かな

参道の公孫樹黄葉を振り返る

分け入りて鳥のよく鳴く冬の山

《作品鑑賞》

村上正人

高尾さんは令和二年四月の特別作品でも『巖島』を詠まれたが、続編ともいえるこの度は、紅葉の頃の巖島を詠んだ作品となっている。特に全十句のほとんどに詠嘆の「かな」で締める印象的な「紅葉」が五句つづけて置かれ、直後に参道にて振り返る息を呑むような公孫樹「黄葉」の句を置いたことで、まるで美しい光景の写真集をめくる驚きのようになり、一句が圧倒的な美として伝わってくる。この特別作品はテーマを決めた十句ならではの「構成の醍醐味」も味わわせてもらえる作品となった。私の特に好きな句は次の二句である。

隧道に向かへば石路の花しづか

一葉づつ音もなく散る紅葉かな

亜矢 令和3年1月度特別作品

十二月

亜矢

私は、自分の日常生活を十七音であらわすことを信条とし、決してぶれることのない芯を持って俳句と向き合いたい。

ユーモアのある医師の言葉千両

初雪の新車に触れて消えゆけり

冬日和インコにしやべるインコかな

事細かく楽譜に書ける冬ともし

掲示板に掛けられてをり耳袋

年の瀬の夫の頭にインコのある

電柱に花束置かれ年の暮

折りたたみ短冊に切る古暦

靴下のかかどに穴のあり時雨

ソプラノのカウンタータ聞く十二月

《作品鑑賞》

村上正人

亜矢さんはご自身でも前書きされているように、生活の中の情景を詠む作品を得意とされている。この度の特別作品『十二月』においては、人柄を想像させる医師、くもりのない新車、家族同様のインコ、趣味の音楽、愛情溢れる家族など、それぞれが作者から息吹を与えられ、味わい深い句に表現されている。これら一句一句は的確な季語を通して、日常生活を送る読み手にも自身の体験を思い起こさせるようなワンシーンとしてすっと入ってくるのである。私の特に好きな句は、音楽にまつわる次の二句である。後者は特別作品のタイトルにもなっている「十二月」がよく利いている。

事細かく楽譜に書ける冬ともし

ソプラノのカウンタータ聞く十二月